

「関西学院の美術家」展ができるまで

125
KANSAI GAKUIN
1869-2014

金井紀子

(神戸市立小磯記念美術館学芸員)

神戸市立小磯記念美術館では2013(平成25)年7月20日(土)から10月6日(日)にかけて、特別展「関西学院の美術家～知られざる神戸モダニズム～」を開催します。関西学院出身の洋画家(大森啓助、野口彌太郎、神原浩、吉原治良、児玉幸雄、片岡真太郎、石阪春生)、創作版画家(北村今三、春村ただを、川西祐三郎)等の作品約170点を紹介します。

関西学院(中学部・高等部・法人部・学院史編纂室)からは、旧制中学部の図画(美術)教諭だった神原浩(1892-70)の作品等と資料を計25点お借りします。本展覧会の企画を学院史編纂室に提示したのは、昨年5月。以後、多くの幸運に恵まれ、学校からは「2014年が創立125周年にあたるので記念文化事業に」等、全面的な協力の申し出をいただきました。

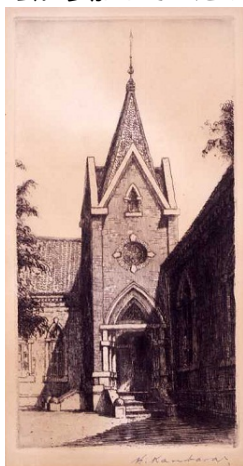
企画自体は唐突に出てきた訳ではなく、筆者は関西学院出身の美術家達に関心を持ち、10年以上前から学院史編纂室を時々訪れ、お世話になってきました。ここでは、その調査記録を振り返り、「関西学院の美術家」展誕生の経緯を紹介したいと思います。

◆「川西英と神戸の版画—三紅会に集った人々—」展

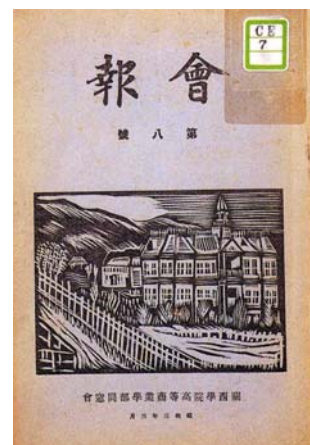
最初に同室を訪ねたのは、「川西英と神戸の版画—三紅会に集った人々—」展(神戸市立小磯記念美術館、会期:1999年10月8日~11月28日)の調査のためでした。当美術館は神戸出身の洋画家・小磯良平(1903-88)の画業を顕彰する小規模館で、開催する展覧会も小磯良平や神戸にゆかりのある画家が中心です。筆者は神戸出身の創作版画家・川西英(1894-1965)の戦前の作品に惹かれ、川西が、明石出身で神戸高等商業学校(現・神戸大学)に学んだ版画家・前田藤四郎(1904-91)等と共に、昭和初期の神戸で活動していた三紅会という創作版画グループを紹介したいと考えました。

北村今三(1900-46)や春村ただを(1901-77)といっても、ご存じない方が多いと思います。川西英と親しく、三紅会に木版画を発表したモダニスト達です。兵庫県立近代美術館が『特別展 兵庫の美術家 県内洋画壇回顧』(1976)の展覧会図録で公表した三紅会の参加者名を頼りに、1999(平成11)年当時彼らについて調べようとしても、日本創作版画協会に参加した版画家という位で、美術館関係者もあまり知らず、生没年不詳でした。70年位前のことがいかに分からなくなるか、愕然としました。

経歴不詳の彼らを追うため、戦前、原田の森に隣接していた神戸高等商業学校と関西学院の卒業生に含まれていないか、神戸大学と関西学院大学に問い合わせました。油彩画と銅版画を制作した神原浩も三紅会に参加していたので、関西学院に関係があるかも知れないと考えたのです。そして学院史資料室(現・学院史編纂室)の池田裕子氏に、「北村今三は高等学部商科の卒業生」と回答いただきました。1999年2月19日、同室資料庫で北村今三が表紙画を手がけた同窓会報等を閲覧し、3月11日に神原浩のランチ・メモリアル・チャペルや六甲山を描いた銅版画を目にしたことは忘れられません。



神原浩《礼拝堂(原田村旧関西学院)》1930年代前半頃 エッチング・紙 関西学院中学部蔵



『関西学院高等商業学部同窓会報』第8号1928年(表紙画・北村今三) 関西学院 学院史編纂室蔵

川西英のご子息である木版画家の川西祐三郎氏(1923-)も関西学院大学の出身です。北村今三と春村ただをの作品は、当時公立美術館の所蔵が極めて少なかったのですが、祐三郎氏が受け継がれた父・英が蒐集した創作版画コレクションの一部に彼らの作品が含まれており、調査させていただき、同展で紹介しました。

同年3月、学院史資料室の紹介により、神原浩の直弟子である中川久一先生(1981年度まで高等部美術科教諭)を、名谷のご自宅に訪ね、お話をうかがいました。当事者への聞き取りは重要です。中川先生は、戦前の中学部の美術部がいかに活気に満ちていたか、「神原先生」と一緒に写生旅行した思い出等を生き生きと語られま

した。画家であり、優れた教育者だった「神原先生」の温かい人柄がしのばれました。年譜の編集の際、参考にさせていただきました。

このように、「川西 英と神戸の版画」展は様々な点で関西学院と縁が深く、筆者にとって研究の出発点となりました。展覧会の調査で判明した事柄の一部は、学院史資料室の依頼により「関西学院の美術家 - 神原 浩と北村今三 - 」(『関西学院史紀要』第6号、2000年所収)として発表しました。

◆ 北村今三と春村ただをに関する継続調査

北村今三と春村ただをについては、「川西 英と神戸の版画」展終了後も、遺族とは出会えず、年譜も未完のままでした。2000(平成12)年1月20日、関西学院グリークラブOBで神戸土曜会の指揮者を長く務められた北村信雄氏が小磯記念美術館を訪ねて来られ、自分は甥にあたり、今三は戦後間もなく亡くなったと申し出られました。スポーツ万能だった北村今三は、気の毒にも短い生涯だったと分かりました。

同年4月、筆者は神戸市立博物館へ異動しました。北村信雄氏は時々博物館に来られ、戦前の神戸で催された音楽会の思い出などを語られました。そのような聞き取り過程で、信雄氏の父にあたる今三の11歳上の兄・吾三郎も関西学院出身で、山田耕筰と親しいグリークラブ仲間だったという大変重要な話を知りました。なぜなら、関西学院OBで日本近代音楽史の重鎮である山田耕筰は、ドイツ留学を終えて帰国する際、日本にドイツ表現主義の木版画を持ち帰り、1914(大正3)年3月に東京・日比谷美術館で「デア・シュトルム木版画展覧会」を開催、当時の青年や画家達に大きな影響を与えたからです。日本における表現主義受容の重要な契機であり、創作版画史の原点の一つでした。表現主義的な作品を制作した北村今三は、まさに日本でダイレクトにドイツ表現主義に触れうる場所に生きたという背景が鮮やかに浮かびあがりました。

筆者は神戸市立博物館で川西祐三郎氏の依頼により、2001(平成13)年3月から「川西英旧蔵創作版画資料」という1,000件を超えるコレクションを調査しました。その中に北村今三《ハーブ》(1920~21年頃、京都国立近代美術館蔵)という作品が含まれています。「関西学院の美術家」展で紹介しますが、描かれた子どもは、北村信雄氏とのことで、2002(平成14)年4月、氏の青葉台のご自宅へ調査に伺い、作品と似た構図のハーブの傍らに信雄少年がいる写真を確認しました。父・吾三郎は西洋音楽と洋楽器が好きで、自宅にハーブを所蔵していたそうです。北村信雄氏との交流からは、創作版画と音楽との関わりについて考えるヒントを得たと思います。神戸市立博物館で企画開催した「描かれた音楽」展(2003)においても、この《ハーブ》を展示しました。



北村今三《ハーブ》1920~21年頃
木版色摺・紙 京都国立近代美術館蔵

春村ただをについては、2004(平成16)年9月に娘さんが健在だと千葉市美術館から連絡があり、版画史研究者達と千葉市在住の長女・多田晶子氏を訪問しました。そこで、春村は雅名で本名は田邊唯雄である、千葉出身で関西学院高等学部商科に在籍しながらも卒業はしなかった、神戸大空襲で家と作品を全て失い、戦後は故郷に戻り公務員になったという経歴が分かりました。



春村ただを《トーアホテル》1922年
木版色摺・紙 神戸市立博物館蔵

ただし、各種の裏付けを得たのは5年後です。2009(平成21)年の夏季休暇に、彼の生まれ故郷である九十九里浜に近い千葉県長生郡白子町を訪ね、10月1日に「田邊唯雄」の調査のために学院史編纂室を再訪しました。同月13日、多田晶子氏に再び会いに行き、聞き取りと照合作業を重ねました。それにしても、名前自体が違うとは。記憶力抜群の娘さんの証言が無ければ、父親に絵を描いていることを知られるのが嫌で複数の雅名を使っていた「春村ただを」は、歴史の闇に埋もれたままであったと思います。

春村ただをは、関西学院で北村今三に出会って木版画に目覚めたのです。大正末期の関西学院で若い創作版画家たちが活躍した、トーアホテルや次々と建設されていく神戸の洋風建築を題材にしていた——これらを確認した時、原田の森の関西学院は神戸モダニズムを育んだ地として、

神戸港や旧居留地と共にもっと再評価されるべきだと痛感しました。彼については、「版画家・春村ただをとその作品について」(『神戸市立博物館研究紀要』第26号、2010年所収)にまとめました。

また、多田晶子氏が「母が亡くなる前、大倉山の図書館に作品を入れたと言っていた」と記憶を辿られた言葉を頼りに、神戸市立中央図書館の協力を得て、版画集『神戸風景』『春』等が同館に収蔵されているのを掘り出しました。春村ただをは先見の明を持ち、1936～37(昭和11～12)年頃、まだ美術館の無かった神戸に、自分の代表作を図書館に納めていたのです。手元の作品や道具類は戦災で全て焼けてしまっているので、これら17点の木版画は貴重です。研究紀要執筆を機に、2010(平成22)年3月、今後の展示活用のため神戸市立博物館に保管転換されました。「関西学院の美術家」展では、半期ずつ全点を展示します。

春村ただをと多田晶子氏の一家が、1945(昭和20)年6月5日の神戸大空襲で焼け出された場所は、現在の神戸市灘区中郷町でした。何度か話を伺う中で、すぐ近くに野坂昭如氏の家族が住み、小説「火垂るの墓」に記された惨事を、多田氏も直接の体験者としてご存じと分かりました。ある仕事で別の仕事と繋がるということは珍しくありませんが、2011(平成23)年に、神戸市立博物館でアニメーションの背景画を紹介する「山本二三」展が開催されました。宮崎駿監督の「天空の城ラピュタ」や「もののけ姫」のために描かれた原画等と共に、高畑勲監督の「火垂るの墓」のために山本氏が西宮と神戸に取材して、緻密に描いた背景画が特集展示されました。

筆者は「山本二三」展のフィールドワークで、御影公会堂をはじめ「火垂るの墓」ゆかりの地を子ども達と訪ねた時に、「まさに春村ただをもこのあたりに住み、全て焼失したのだ」と非常にリアルな恐怖感に襲われました。

◆ 神戸市立博物館の近代絵画コレクションと作品補修

筆者は2000(平成12)年4月から2012(平成24)年4月まで、神戸市立博物館に勤務しました。博物館に職中は、神戸市に1979(昭和54)年度に寄贈された川西英作品の調査整理作業が一つの役割で、また近代神戸風景の収集を意識していました。その中で神原浩作品についての照会や寄贈、大森啓助(1898-1987)の作品寄贈に関わることが出来たのは喜びでした。現在も続く「絵画部弦月会」の創立期に活躍した神原と大森の作品は、神戸にあるのがふさわしいと考えていましたので。

大森啓助作品は、奥様の房子氏より2003年度と2004年度の二度にわたり代表作12点が寄贈されました。大森房子氏は、作品の題名や号数をまとめておられました。その労力のおかげで、初期の滞欧作や戦後間もない頃に制作された群像作品などを把握しやすく、神戸に優品を里帰りさせることが出来ました。大森啓助は、戦前作を東京大空襲で失い、戦後は気に入った自作をほとんど売っていなかったそうで、作品は公立美術館にあまり収蔵されていません。

そのため、神戸市立博物館蔵となった油彩画は貴重だと考えてい

ますが、半分は状態が芳しくなく、補修費が無いために修復が出来ないまま数年間収蔵庫で眠っていました。

今回、「関西学院の美術家」展開催にあたり、残り6点(《休息》《洋裁店》《室内》《母と子》《魚の静物》《潮騒》)が、大森房子氏と関西学院の援助により、修復・公開できることとなりました。2013(平成25)年3月15日より複数の修復家により作業が進められました。

大森啓助《ダンス(群像)》1947年
油彩・キャンバス 神戸市立博物館蔵



多田晶子氏と川西祐三郎氏(2010年)
神戸市立博物館にて
春村ただをの娘と川西英の息子が神戸で再会と
いう現場に立ち会って学芸員冥利につきました。



大森房子氏(2009年)東京都内にて
大森啓助はミモザの花が好きだった。

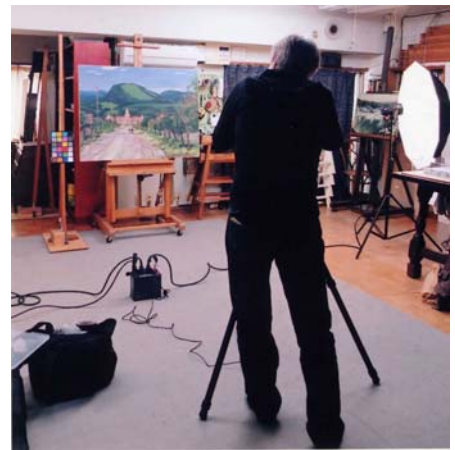


第38回 関西学院史研究会を7月9日(日) 15:10から16:40まで、吉岡記念館2階 研修室1にて開催します。
テーマは「関西学院の美術」、講師は東浦哲也先生(関西学院高等部陸演諭)です。どうぞご参加ください。

関西学院の協力を得て修復された作品には、神原 浩の滞欧作《外国風景》(1920年、神戸市立博物館蔵)も含まれています。4月29日、作品の一部が戻りました。色彩が蘇った大森作品や印象派を思わせる神原の初期油彩画を目にした時、「これらの作品の存在が、展覧会の企画を運んできたのだ」と実感しました。作品補修に対する支援のおかげで展覧会の内容が充実し、新出作品を見ていただくことができます。

関西学院高等部が所蔵する神原 浩《曇天の安乗岬》については、中川久一先生の後継者・東浦哲也先生の尽力により、修復・公開できることになりました。海景画を得意とした神原の面目躍如たる作品です。

関西学院の皆様は校友課の前に飾られていた小林泰次郎《正門前から図書館を望む》(1931)という作品を、覚えておられますか？小林泰次郎自身は関西学院の出身者ではないのですが、昭和初期の上ヶ原風景を活写した本作を、今回一緒に展示します。この油彩画も修復が施されました。



修復された小林泰次郎《正門前から図書館を望む》の撮影(2013年)
右奥には神原 浩《曇天の安乗岬》が見える。

川西祐三郎氏についてもお話ししたいと思います。氏は、父・英の作品が収められている神戸市立博物館への自作の寄贈を熱望されたため、膨大な作品が収蔵されることになりました。筆者は2007~2009(平成19~21)年度に931件の作品整理に携わり、2010(平成22)年に「受贈記念 川西祐三郎」展を担当、制作の全貌を紹介しました。

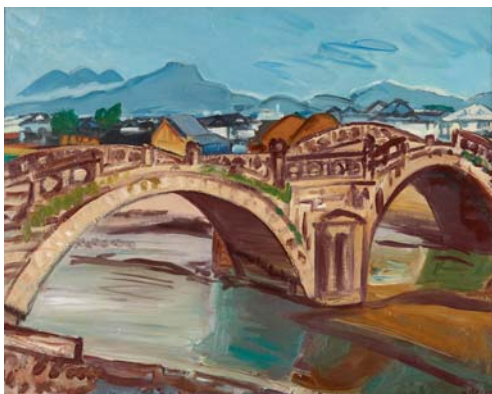
筆者は本稿の最初に紹介した北村今三や春村ただをの作品を含む「川西英旧蔵創作版画資料」を、川西祐三郎氏の作品とともに神戸市立博物館に受け入れる準備をしていました。結局、創作版画の方は、「川西英コレクション」として京都国立近代美術館が購入しました。ただ、忘れてはならないと思うのですが、川西 英という優れた創作版画家にして蒐集家だった巨人がいたからこそ、北村今三と春村ただをの作品は今の世に受け継がれたのです。「関西学院の美術家」展では京都国立近代美術館から多数作品をお借りしますが、これらは川西 英が関西学院の仲間を大切に思い、手元に置いていた作品群なのです。

◆ 諫早市の野口彌太郎作品など

野口彌太郎(1899-1976)の作品については、今回ゆかりの地である長崎県、長崎市、諫早市から代表作をお借りします。《諫早の眼鏡橋》(1959)は諫早大水害の後の石橋を描いたものです。各作品にはそれぞれ物語があり、「関西学院の美術家」展は、まさに学院史編纂室での調査や、そこから生まれた縁、神戸市立博物館における作品収集、作品補修に対する助成により構成可能となった展覧会です。

筆者にとって、学院史編纂室は灯台のような意味を持っています。何度も訪問し、資料を閲覧させていただき、親切なご教示を得ました。また、外部での調査内容を照合・精査させて貰いました。

今年3月は、関西学院の古写真を展覧会でパネル紹介するための選定作業と写真撮影を行いました。4~5月は諫早市と修復家の工房で補修された作品の写真撮影をしました。しかし、展示準備の本番はこれからです。事故無く、各地より作品を集荷・展示し、撤去・返却完了させるまで、気を抜かず責務を果たしたいと考えています。そして、本展覧会を機により多くの関西学院出身の美術家達の情報が、学院史編纂室と小磯記念美術館に寄せられることを願っています。



野口彌太郎《諫早の眼鏡橋》1959年
油彩・キャンバス、諫早市蔵



諫早図書館での撮影風景(2013年)